

ガイド教本・アイヌ民族編  
〈動物編〉

## ガイド教本（動物編）発行について

北海道を訪れる観光客と第一線で接する方々に対し、アイヌ民族の歴史や文化についての正しい情報が提供されていないという現状から、一昨年、バスガイドをはじめボランティアガイドの方々向けに「ガイド教本・アイヌ民族編」を作成しました。

この教本には、アイヌ民族の基礎的な情報を記載するとともに、観光業に携わる方々が知りたい情報を提供し好評を得ました。

昨年から当機構が実施している「アイヌ文化研修会」などで、アイヌ民族との関わりを持つ動物についての照会が多くあることから、この度、追加資料として「動物編」を発行することとしました。

内容としては、①アイヌ民族と特に関わりの深い動物・魚 ②アイヌ語名（由来、意味） ③日常生活での関わり伝承など、写真を交え分かりやすく紹介しました。

現場でご活躍されている関係各位の皆様はこの資料を有効に活用していただき、アイヌ民族の正しい理解と北海道観光の発展に役立てていただければ幸に存じます。

## 目 次

凡例 .....	P. 1
1. アイヌ民族動物編 .....	P. 4

※このガイド教本は、(社)北海道観光振興機構ホームページにも掲載しております。

### <検索方法>

■北海道ぐるり旅HP

<http://www.visit-hokkaido.jp/soshiki/data/ainu/index.html>

→ガイド教本・アイヌ民族編

## 凡 例

### アイヌ語の読み書き

- ① 本書のアイヌ語は、カタカナとローマ字表記としました。

#### \*母音で終わる音

ア	a	イ	i	ウ	u	エ	e	オ	o
カ	ka	キ	ki	ク	ku	ケ	ke	コ	ko
サ	sa	シ	si	ス	su	セ	se	ソ	so
タ	ta			トゥ	tu	テ	te	ト	to
チャ	ca	チ	ci	チュ	cu	チェ	ce	チョ	co
ナ	na	ニ	ni	ヌ	nu	ネ	ne	ノ	no
ハ	ha	ヒ	hi	フ	hu	ヘ	he	ホ	ho
パ	pa	ピ	pi	プ	pu	ペ	pe	ポ	po
マ	ma	ミ	mi	ム	mu	メ	me	モ	mo
ヤ	ya			ユ	yu	イエ	ye	ヨ	yo
ラ	ra	リ	ri	ル	ru	レ	re	ロ	ro
ワ	wa					ウエ	we	ウオ	wo

#### \*後ろに母音が続かない音

プ	p	ツ	t	ク	k	ム	m	ン	n
シ	s	-ラ,-リ,-ル,-レ,-ロ	r	イ	-y	ウ	-w		
—	'								

(音を出さない区切りの印)

- ② 小さい プ ッ ク

練習して慣れないと区別の難しい発音です。日本語の「さっぱり」という言葉をいうつもりで「ぱり」をいわず「さっ」で止めると、アイヌ語の

サプになります。

「さっと」という言葉をいうつもりで「さっ」で止めると、アイヌ語のサツになります。

「さっき」という言葉をいうつもりで「さっ」で止めると、アイヌ語のサクになります。

いろいろ例を挙げますので、耳慣らしをしてください。

サプ	sap	前に出る
サツ	sat	乾く
サク	sak	夏
ユク	yuk	鹿
チカプ	cikap	鳥
ペツ	pet	川
チェプ	cep	魚

③ 小さい シ 大きい シ

小さいシはささやくような音で、シに聞こえたりスに聞こえたりもしますが、シに統一して表記します。大きいシは、はっきり母音を発音する必要があります。

④ 小さいラ、リ、ル、レ、ロと大きいラリルレロ

小さいラ、リ、ル、レ、ロで書かれる音はあいまいに、大きいラリルレロで書かれる音ははっきりと発音します。

ケレ	ker	靴
ケレ	kure	触る
エトロ	etor	鼻汁

○	エトロ	etoro	いびきをかく
	キサラ	kisar	耳
	クキサラ	ku=kisara	私の耳

- ⑤ トゥ tuの読み方は「トゥナイト」の「トゥ」と同じような発音です。
- ⑥ イェ yeの読み方は「イェスタディ」の「イェ」と同じような発音です。
- ⑦ ウェ weの読み方は「ウェールズ」の「ウェ」と同じような発音です。

- ・本書におけるアイヌ語表記は、(社北海道ウタリ協会『アコロイタク アイヌ語テキスト1』(1994)にはほぼ準拠しています。
- ・本書は、(社北海道観光連盟『アイヌ文化を理解するための手引き－新たな観光をめざして－』(2004)を基礎に作成したものです。
- ・上記以外の参考文献は、項目の最後に記載しています。



## ・ヒグマ

**キムンカムイ** **kimunkamuy** [kim-un-kamuy (山に・居る・神)]

ほかにkamuy (神) と省略的に言う事も多い。たくさんいるカムイ「神」の中でカムイと言うだけで、ヒグマを指しそれだけで通じるのは、北海道のアイヌ民族にとっていかにヒグマが身近で大切な存在であったかがうかがえる。方言の違いやクマの年齢や性質などの特徴でいくつもの呼び名があります。例えば次のような言い方があります。

エカシ ekasi (お爺さん)

キムンエカシ kimun-ekasi (山の・お爺さん)  
nupuri-kor-kamuy (山・を支配する・神)

エペレ eper (一歳の小熊)

シケカムイ sike-kamuy (荷物をしょった・神)  
ふとった・神

sike-kamuyだがアイヌは熊の神は肉と毛皮、熊ノ胃(胆のう)を土産に地上の国へ遊びに来た仮の姿であると考えるので太った熊をこのように呼んだのである。

e-penka-usi (前の方に・つえを・ついている) 前足が長い神

o-panka-usi (後ろの方に・つえを・ついている) 後ろ足が長い神

前足が長い熊を射損じたら坂の上に向かって逃げ

る、逆に後ろ足の長い熊だったら坂の下に向かって逃げるとアイヌには伝えられている。現代人が<sup>ひぐま</sup>熊に遭ってしまった時の対処法は他にあるのでそちらを参考にして頂きたい。《レンジャー、熊の研究家、北海道庁》など

wen-kamuy (悪い・神)

初雪が降っても冬眠しない熊、人を襲った熊、銀毛の多い熊（気性が荒い）などを指して言う。

イオマンテ、イヨマンテと呼ばれる儀式が有名だが特に熊のイオマンテは盛大に執り行われた。（8、使用上注意すべき主な用語について(5)参照）

熊についてはまだまだ書ききれないほどの話があります。もっと知りたい方は専門書などで調べて頂きたい。



## ・エゾオオカミ

ホロケウ、ホロケウカムイ horkew[horkeu](狼)  
horkew-kamuyとも  
いう。

明治時代にエゾ鹿が本州方面に送る缶詰生産と毛皮目的によって乱獲され自然界での食糧不足がオオカミの減少をもたらした。その結果飢えたオオカミによる開拓農民の家畜を襲うという事件が多く起きた。人間の一方的な考えから開拓使『現在の北海道庁』によって害獣として駆除されたことが追い打ちをかけ1896年頃に絶滅した。

体長120～124センチ 尾27～40センチ シェパードほどの大きさでエゾオオカミの方がはるかに大型である。



○ アイヌ民族は鹿をとる神、猟をする神として狼を崇めて共存共栄していた。

○ オオカミは自分たちで鹿をとって食べていても人間がたまたま通りかかり咳払いするとその肉をゆずるといふ。逆に熊は自分が獲った獲物を人間に横取りされると村まで取り返しに来るほど執着心が強く恐ろしいものとしている。だからアイヌはけして狼に矢を向けてはならないと戒められている。又熊に襲われた人間を熊から救うなどの話が伝承されるなどアイヌとは良き隣人のようであった。



## ・エゾシカ ユク yuk

エゾシカはニホンジカの一亜種で最も体格が大きく（頭胴長：オス180cm、メス150cm）、夏の体毛は茶色に白い斑点、冬は全身黒褐色になります。オスには角がはえ、年とともに枝分かれして大きくなります。5～6月に落角し、すぐに新しい角が成長を始めます。生息場所はエサになる草地のある森林地帯を主としています。

明治時代には大雪の影響と乱獲、北海道開拓による生息域の破壊などが重なり、大きく個体数を減らしてしまいます。その後、1890（明治23）～1900（明治33）年、1920（大正9）～1956（昭和31）年の禁猟期間を経て、徐々に生息数が回復し今日に至っています。



○ エゾシカは石狩川筋のアイヌにとって、食料ではあったがカムイではありませんでした。

○ 神が人間のためにばら撒いたもちのようなもので、食べればよいのだと考えていました。

○ かつては、北海道アイヌの重要な食料源であり、毛皮・角なども生活用具の素材や交易品として幅広く活用されていました。ユクウル（鹿皮の衣）、クヨイ（鹿の膀胱で作った水袋）、イパプケニ（鹿呼び笛）、マカニツ（矢骨）など、多くの民具が今日に伝えられています。

○

○

○

・キツネ

チロンヌプ cironnup

(旭川)

スマリ／シュマリ

キツネを指すアイヌ語は、いくつかあり、チロンヌプのほかにケマコシネカムイとも呼ばれる。チロンヌプを語源分解するとチ=我ら、ロンヌ=殺す、プ=もの、となる。一方ケマコシネカムイは、ケマ=脚、コシネ=軽い、カムイ=神、となる。チロンヌプの語源分解から考えると、獲物の一つと言える。ケマコシネカムイの語源分解からは、速く走ることが出来る動物であることが分かる。

伝承－「キツネのチャランケ（談判）」『キツネのチャランケ』（萱野茂著・小峰書店、1974年）



- <ストーリー>支笏湖のほとりに棲んでいたキツネが、ウサクマイ村のアイヌの青年が捕ったたくさんのシャケの中から1匹を失敬したところ、その青年が悪口を浴びせ、ポクナモシリ（裏側の国土）へ追放されそうになる。そこでキツネは、そのウサクマイ村へ行き「キツネも神から授かったシャケを食う権利がある」とチャランケ（談判）をし追放を免れ、アイヌ（人間）がキツネに謝罪し、アイヌ（人間）はそのキツネに守られながら暮らしました、というお話。
- 
- 
-

・タヌキ

モユク moyuk

タヌキを指すアイヌ語はモユク。タヌキは脂身の多い動物であるため食糧として珍重された。沙流川流域では「タヌキ送り」の風習がある。1964～65年にNHKの記録映画「ユーカラの世界」が撮影された時に、二風谷ではタヌキが飼育されていた。映画に記録されたか否かは不明であるが、「タヌキ送り」がこの時代までは伝承されていた。

伝承－「ムジナとクマ」『炎の馬』（萱野茂著、すずさわ書店、1977年）

<ストーリー>年寄りグマと若い娘のムジナが一緒に暮らしていました。年寄りグマは、人間世界に行って、若返ろうと思い村長の息子たちが狩りに来る事を知り、巣穴の前に新しい土を出しておくように



○ ムジナに命令した。クマとムジナは、弓で仕留められ村へ運ばれ盛大な歓迎を受けました。自分たちの肉がご馳走としてお椀に盛られ、ユカラ（英雄叙事詩）などを聞かせてもらいました。ムジナはクマに自分の肉を食うと神の世界へ戻ることが出来ないの  
○ で、絶対に口にはしてはいけない、と命じられていたのに、我慢できずムジナは自分の肉を食べてしま  
○ います。そのためムジナは、罰により神の世界へは戻ることが出来ず、人間世界で戸口を守る神、そしてお産を手助けする神として残ることになった、というお話。(注)

\*ムジナとタヌキは同じか否かの議論はしない。この物語ではモユクと表現されているのでタヌキであると思われる。表題のみ「ムジナ」となっているがタヌキと解してよい。

・テン

ホイヌ hoynu

ネコ目、イタチ科、テン属

イタチ科の動物の中で最も樹上生活に適している。昆虫・果実などを食べ、夜間は地上活動し、昼間は木で寝る。



## ・カワウソ

### エサマン esaman

カワウソを指すアイヌ語はエサマン。イタチに似た水辺に棲む獣。扁平な尾を持つのが特徴である。今から50年くらい前までは沙流川にも棲んでいた。

『知里辞典』(動物編)には次のように記されている。  
[この語の語原は、たぶん e-saman-ki 「それで・サマンを・する」であったと思われるが、saman の意味が忘れられるに従って、民間語源はそれを esaman-ki 「エサマンを・する」と分析し、このト占にはカワウソの頭骨が多く用いられたので、esaman がカワウソの意味になったのではなからうか。]

伝承-「カワウソが人間に化けた話」『炎の馬』(萱野茂著、すずさわ書店、1977年)

<ストーリー>お爺さんいいなすけに育てられた少年が、自分の許婚の元を訪ねると、カワウソが自分そっくりに化けて先に来ていた。そこで、そのカワウソを贖者と見破り退治し、カワウソを見守るべき海の神がしっかりしていないからだ、と叱りつけた。海の神は「本来、人間は人間同士、神は神同士が結婚しなければならないが、若い者の恋心に免じ許して欲しい」と言った。

そのお詫びに毎年1頭のクジラを贈ろう、と約束した。実は育てのお爺さんいいなすけは家の守護神であった。その後、許婚いいなすけと結婚し、現在は多くの孫に囲まれ幸せに暮らしています、という話。

・エゾイタチ

ウパシチロンヌブ **upas-cironnup** [〈upas 雪  
cironnup けもの]

・イヌ

セタ **seta**

北海道犬は、北海道原産の日本犬種（古くから日本に住んでいる犬の総称）です。

1869（明治2）年に、イギリスの動物学者T・W・ブラキストンによりアイヌ犬と命名され、1937（昭和12）年には国の天然記念物に指定され、同時に正式名称が「北海道犬」と定められました。

三角形の小さな「立ち耳」をもつ中型犬で、目尻が吊り上がった、三角形の小さな目を特徴とします。性格は飼い主に忠実で、勇敢、大胆、怖いもの知らずで、我慢強く、粗食に耐え、寒さに強いとされています。

伝統的なアイヌ社会において、犬の飼育は広く一般に行なわれており、狩猟・漁猟を行なうときの心強いパートナーでした。アイヌの民具としては、セタウル（犬皮の衣）が今日に伝えられています。



・ウサギ

イセポ **isepo** [〈i-se-p-po i (ウサギの悲鳴) ; i-se  
([ウサギが] キイと鳴く) -p (もの)  
-po(指小辞) ; ‘キイキイ鳴く小さなもの’]



・アザラシ



トッカリ／トゥカラ **tukar**

トッカリは、アザラシの総称。アザラシの種類、  
年齢、地域や状況によって呼び名が異なる。

樺太（東海岸）では、アザラシの総称を「カムイ」、  
西海岸では、「カムイ」はトドを指す。北海道、千  
島地方ではクマをさす。



・ラッコ

rakko [らっこ]

有名なラッコですが、アイヌ語由来である事はあまり知られていない。

atuy-esaman (海・かわうそとも呼ばれる)

北方四島に居るラッコの皮は世界一といわれるほど上質で一時乱獲によって絶滅したとみられていたが、現在保護されているためその数を回復している事が研究者から報告されている。体長は150センチにもなり、お腹の上に貝などのえさをのせ石で割っている様子はとても愛らしく水族館でも人気の的である。



・ネズミ

エルム erum

○  
・シャチ

レプンカムイ repunkamuy

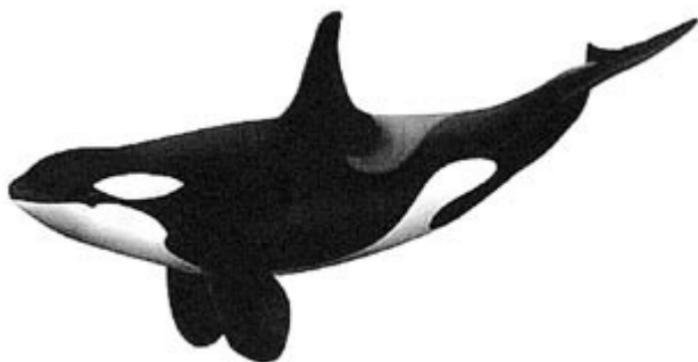
○  
○  
○ シャチを指すアイヌ語はレプンカムイで、それを語源分解するとレプ=沖、ウン=いる、カムイ=神、となる。レプンカムイという名前から考えシャチはアイヌ（人間）から大切にされていたことが分かる。なぜ「沖の神様」と名付けられたかと言うと、シャチがクジラを追い回し、浜辺にクジラを寄り上げて、クジラ肉という食糧をアイヌ（人間）に与えてくれる、と考えていることによる。

○ 伝承－「襟裳岬のシャチの神」、『萱野茂のアイヌ神話集成第2巻』カムイユカラ編Ⅱ（萱野茂著、ピクチャーエンタテイメント株式会社、1998年）

<ストーリー>母親が自分の娘のお婿さんは誰にしようか思案し、クマ神は大食いだし、オオカミ神は



足が速いし、龍神は音が大き過ぎるし、アイヌラックル（オキクルミの別称。半分神で半分人間）は火を使うので熱いだろう。シャチ神が最適だと言った。すると、シャチに自分の娘がさらわれてしまった。泣き暮らしていた母親は、夢で娘の無事を知らされ、シャチ神は、「毎年、クジラを襟裳岬に寄こす」と約束した。それから、襟裳岬にはクジラが寄りあがるようになった、というお話。



## ・クジラ

### フンペ hunpe

大型のクジラは昔からたくさんの肉を食糧として与えてくれました。かつてはクジラ漁といっても船で出かけて行って銚などでおこなう漁よりも、シャチなどに追われ海岸に打ち上げられた寄りクジラの利用がほとんどでした。そういったことから古くから伝わる舞踊の中にフンペリムセ（鯨の踊）が各地に伝わっています。工芸品にはクジラの髭が用いられ、透かし文様などの彫刻を施したものもあります。

北海道の海岸各地にはクジラのアイヌ語名「フンペ」がつく地名が多くあります。例えば広尾町のフンペの滝、室蘭市のフンペシュマ、登別市にフンペサパと呼ばれるなどがあります。

《フンペサパ（鯨の頭）にまつわる伝説(登別市)》

昔、オキナ（マッコウクジラ）という巨鯨がいて、海の魚ばかりか漁に出た人間をも飲み込んでしまうので、神々が心配して、六日六晩かかって刀をつくり、それをカワウソの神様に持たせて退治に向かわせた。ところがカワウソは世界の果てまで行って、オキナと出逢ったが、大声をあげてどなり散らすだけで、一向に刀を抜いて切ろうとしない。その争いの声が物凄いのので、どこへ行っても神々は逃げてしまい、助太刀しようとしなかった。それを登別の神だけは逃げようともせず「なぜ刀を抜いて切ろうとしないのだ」とカワウソに注意をしたので、カワウ

ソは初めて刀をもっているのに気付き、刀を抜くなりオキナを真二つに切って、頭の部分を登別の神にお礼において行った。それが現在のフンペサパの呼ばれる丘になったのだという。(出典：更科源蔵・更科光『コタン生物記Ⅱ 野獣、海獣、魚族篇』(法政大学出版局1976)

\*カワウソはアイヌ民族に伝わるお話の中では物忘れのはげしい神様として登場することが多いです。

○ ・エゾリス

トウスニケ tusunike

トウスニンケ tusuninke

○ エゾリスを指すアイヌ語はトウスニケ。北海道方言ではエゾリスをキネズミと呼んでいる。

○ 『知里辞典』（動物編）にはトウスニンケとなっていて「[(1)tusuninke [〈tusu (巫術) ninke (消す); 巫術<sup>ふじゆつ</sup>を使って姿を消すもの'の義か]」とされている。萱野茂の言い伝えであるが「エゾリスに小便をかけられると運が悪くなる」と。また、山を歩いている時にエゾリスに見つめられると、髪の毛が一本立ちになり殺気を感じる。そのような場合は、ゆっくりと周りを見回し、こちらを見ているもの（動物）を確認しなければならない、とされている。



## ・シマリス

### ルウォプ ruop

シマリスを指すアイヌ語はルウォプ。語源分解するとル=道、オ=入る、プ=もの、となる。体に対して縦方向に長い模様があるが、その模様を指し「道が入っているもの」と名付けている。『知里辞典』（動物編）にはカシイキルクスとなっており、「(1) kasiikirkus [〈kasi-ikir-kus (その上に・線・通っている)；‘その背面に縞が通っているもの’] 《ホロベツ；レブン》」と解説されている。





・トナカイ

トウナカイ tunakay

成獣をトウナカイ (tunakay) という。



シカ科の哺乳類。北極地方のツンドラ地帯に住み、雌雄ともに角をもち、ひずめが大きい。

古くから家畜化されている。



・モモンガ

アツ at

モモンガ亜科に属する小型哺乳類。  
滑空によって飛翔するリスの仲間。



○  
・トド

エタシペ *etaspe*

○  
トドを指すアイヌ語はエタシペ。『知里辞典』（動物編）には「§ 280.トド；キタアシカ *E.'sea-lion' Eumetopias jubata* (SCHREBER)/(1)*etaspe* a) トドの総称《H.》：b) 成体の雄を言う《S.》注.—チシマでもこの語は使われたらしい。」と解説されている。

○  
伝承—「ウサギとトド」『キツネのチャランケ』（萱野茂著・小峰書店、昭和1974年）

<ストーリー>海辺の波打ち際で昼寝をしているところへウサギが話しかけて、トドの背中に乗せてもらい海へ散歩に出かけます。ところが、海の神の妹が病気になり、ウサギの生肝（なまぎも）を食べると治るということで、トドはウサギを騙して連れて



きたのです。ところがウサギは薬になる肝は木の枝にかけて干してあるので、一度岸へ返してください、と言いました。騙されたウサギは、機転をきかせてトドを騙し、命拾いした、というお話。



○ ・ゼニガタアザラシ

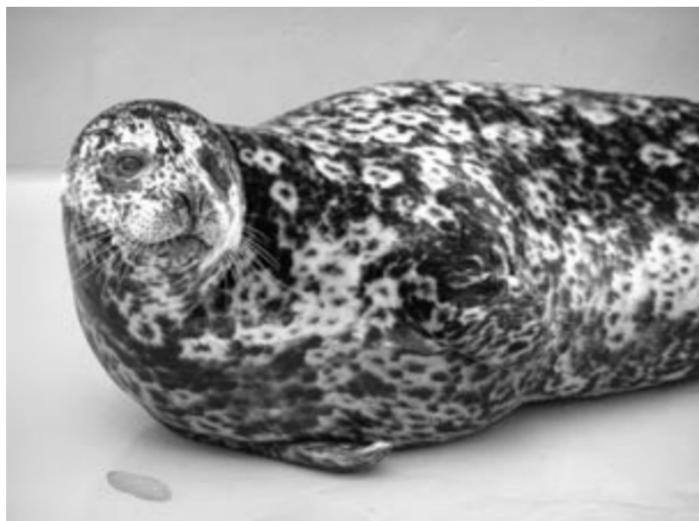
トウカラ **tukar** (アザラシの総称)

○ 日本に定住する唯一のアザラシで、北海道東部の襟裳岬や大黒島(厚岸町)・歯舞諸島などに生息しています。

○ 体長・体重はメスの成獣で120-170cm・50-150kg  
オスの成獣で150-200cm・70-170kgになります。

○ 黒地に白い穴あき銭のような斑紋を持ち、体の色には暗色型と明色型がありますが、日本に生息している個体はほとんどが暗色型です。

新生児は母の胎内で白い産毛が抜けてしまうので、大人と同じ銭形模様で生まれてきます。ゼニガタアザラシは岩場で出産するので、大人と同じ銭形模様であるほうが天敵に狙われにくいという利点がある



あるようです。

日本に生息する亜種は嫌水性で海氷、流水の来ない岩場で定住生活をします。北海道の太平洋側のいくつかの岩礁に定住している個体群もあります。

江戸時代に描かれたアイヌ絵（和人によって描かれたアイヌ民族の姿）をみると、銭形模様のある獣皮衣がたびたび現われます。生息域近くに住む人々の食料源であると同時に、生活用具の素材でもあったのです。





- ・イルカ  
タンヌ(イ) tannu(y)



- ・サケ  
シペ／カムイチェプ sipe/kamuy-cep  
チェプ (cep) [ci-e-p (われら・食う・もの)]



シペ (sipe) [真・魚]、本当の魚と呼ぶ。  
カムイチェプ (kamuy-cep) [神・魚] をサケの総称で呼ぶ地方もあるが、特別なサケをさすことがある。地方によっては、最初に捕れたサケをさす。  
伝承－例) キツネの記述「キツネのチャランケ」  
参照



・エゾシマフクロウ

コタンコロカムイ

**kotankorkamuy** [kotan-kor-kamuy] (村・を守る、を持つ、を司る・神)

**mosir-kor-kamuy** (国土を・守る、を持つ、を司る・神)

**kamuy-cikap** (神・鳥)

**kamuy-ekasi** (神・おじいさん)

昔からアイヌ民族に伝わる伝説に、天に住まうイカツカラカムイ（造形の神）が美しい大地を作り、人間を作り木や動物を作られた。そのように美しいものはウエンカムイ（悪い神）も欲しがるので見張り役として天の国・神の国からフクロウ神が降ろさ





れた。

それ以来モシリコロカムイと呼ぶようになった。  
又アイヌの村に危険が迫ったりしないよう魔を追い  
払ったり熊が近付けば知らせたりするのでコタンコ  
ロカムイとも呼ぶ。



特に道東ではフクロウ神を熊神より位が高いとし  
て、そのイオマンテは一番盛大に執り行われた。



・エゾフクロウ

クンネレクカムイ **kunnerekkamuy** [kunne-rek-kamuy] (夜・啼く・鳥)

**iso-sanke-kamuy** (獲物・を下ろす・神)

この鳥は鳴き声で熊のいる場所を教えてくれる神で、ペウレプ！ペウレプ！

チコイキプ！（小熊だ！小熊だ！獲物だ！）チコイキプとは（我いじめるもの）という意味で、すなわち「けもの・獲物」をさすのでエゾフクロウを〔獲物を授ける神〕と呼ぶ。

○ ・タンチョウ

サロルンカムイ sarorunkamuy[sar-or-un-kamuy]

(葦原の・内に・いる・神)

○ 現在その多くは釧路湿原に住む、国の特別天然記念物に指定されている。「丹頂にはあまり近づくなよ」「あんまり美しいものは人をだますんだ!」「人間の女だってそうだべ?!」とあるアイヌの長老が語っていた。羽を広げると2メートル以上にもなる大きな鳥で、第二次世界大戦後わずかな個体が確認され手厚い保護と、地元民の餌付けが功をそうして今では1,000羽以上が確認されるまで回復した。



・カッコウ

カッコク kakkok

カッコウを指すアイヌ語はカッコク。カッコウは自分で巣を作らず、ほかの鳥の巣へ托卵する習性を持つ。したがって、カッコウの巣を見つける事は難しい。アイヌはカッコウの鳴き声は大変美しいと考えている。

伝承－「カッコウ鳥が私を助けてくれた」『ウウエペケレ集大成』新訂 復刻（萱野茂著・財団法人日本伝統文化振興財団、2005年）



○ <ストーリー>貧乏人の娘が山へ薪（まき）を拾いに行ったとき、カッコウの白銀の卵を3個見つけ家へ持ち帰りました。兄はそれを宝箱にしまい大切にしていました。すると、お金持ちの村長（むらおさ）が、息子の嫁にあなたの娘さんを欲しいと、訪ねて来ました。両親や兄弟は反対し、本人も嫁に行く事を嫌がりました。村長の奥さんが着物や装飾品を持って来て、さらに村長の息子も狩りの手伝いに来るようになりました。そこで貧乏人の娘は村長の息子の所へ嫁に行く事になりました。ある時、嫁に行った娘が夢を見ました。私はカッコウの神で、お前と一緒にの日に生まれたのだ。だからお前をずっと守ってきた。今度は、お前たちがカッコウ神へお祈りを捧げるならば、ずっと守ってあげましょう。私たちは幸せにくなりました、というお話。

・アカゲラ

エソクソキ **esoksoki** [〈e-sokisoki (頭を・トントン打ちつける)〕



・ヒバリ

リコチリポ **rikocirpo** [〈rik (高所) o (に行く) cirpo (小鳥)〕



・カケス

エヤミ eyami

カケスを指すアイヌ語はエヤミ。『知里辞典』（動物編）には、「§ 300.かけす；ミヤマカケス *Garrulus glandarius pallidifrons* KURODA/(1)eyami (エヤミ) 《ホロベツ》ミヤマカケス」と解説されている。

伝承－出典は不明であるが、萱野茂の言い伝えでは、「昔、神の国から、スズメとカケスに訃報が届いた。スズメはすぐに神の国に戻ったが、カケスは見繕いをしていて遅れて神の国へ着いた。スズメは褒められ、カケスは叱られた。これからの人間世界で、スズメは穀物を食ってもよいが、カケスは虫以外食ってはならん、とされた(原典どおり)」という話。

\*スズメの項と同じ話。



○  
・カラス

シパシクル／カララク si-paskur/kararak

○  
道南では、ハシブトガラスをシパシクル (si-paskur) [糞・がらす]。また [大、真の・からす] と呼ばれる。

○  
ハシボソガラスをカララク (kararak) [鳴き声] と呼ぶ。

○  
カラスは好まれない鳥として思われていますが、ハシボソガラスは、鳴き声で吉凶を知らせる神様として扱われました。また、ハシブトガラスは糞ガラスと呼ばれる一方で、狩猟に出かけた時など、危険を知らせたりクマなど獲物の居場所を教える (カラスが集団で騒ぐ) カラスでもあるといわれています。



・オジロワシ

シチカプ *si-cikap* [〈真・鳥〉]

ワシタカ科、オジロワシ属。

国の天然記念物に指定されており、春にふ化し、  
巣立ちまで約70～90日かかる。体長約80cm。翼を広  
げると2 mにも達する大型のワシ。淡褐色の体に、  
白く短い尾羽、黄色いくちばしを持つ。

冬に北海道を中心に渡来するのは数百羽程度。



○ ・エトピリカ

エトウピリカ **etupirka** [〈etu (くちばし)  
pirka (美しい)]

○ 体長40cm・体重750gほどの大きさで、くちばしは橙色で縦に平たく、縦に数本の溝があります。足は橙色で、顔と足以外の全身は黒い羽毛におおわれます。冬羽は顔が灰色で飾り羽がなく、くちばしの根もとも黒っぽいのですが、夏羽では顔が白くなり、目の後ろに黄色の飾り羽が垂れ下がり、くちばしの根もとが黄褐色の独特の風貌になります。

○ 世界的にみると決して少ない鳥ではないものの、日本は分布域の西端にあたり、生息数も多くありません。繁殖個体群も北海道東部の厚岸町大黒島、浜中町霧多布(キリタツプ)小島、根室市ユルリ島、モユルリ島などで十数のつがいが繁殖するのみで、



日本に限っては地域絶滅の危険が大きいとされています。

伝統的なアイヌ社会では、鳥羽衣の素材として用いられたほか、食用にもされていたことが記録されています。





・クマゲラ

チプタ・チカプ **ciptacikap** [cip-ta-cikap] (舟・彫る・鳥)



**cip-ta-cikap-kamuy** (船・を彫る・鳥・神)

アイヌの伝説に、ある年ひどい洪水にみまわれた村が有り、みんな水に流されたがクマゲラが掘った巢穴のある丸太の穴に入れた子供だけが助かった、という話しが伝わり以来それをアイヌが真似をして丸木舟を作るようになったという。それからクマゲラを「舟を彫る鳥」「舟を彫る神」と呼ぶようになった。



・ オオワシ

カパッチリ **kapatcir** [〈kapat cir (鳥)〉]



・ シギ

ヤマシギ

トウレプタチリ **turep-ta-cir** [〈turep (ウバユリ  
の塊根) ta (掘る) cir (鳥)〉]



オオジシギ

チピヤク **cipiyak** [〈鳴き声〉]





・カワセミ

ソカイ sokay

ソカイクムイ sokay kamuy



カワセミは、ブッポウソウ目カワセミ科に分類される鳥。

水辺に生息し、鮮やかな水色の体色と長いくちばし  
が特徴。



大きさはスズメほどで、くちばしが長く、頭が大  
きく、首・尾・足は短い。

オスはくちばしは黒いが、メスは下のくちばしが  
赤いので区別ができる。

光の加減で青く見える構造色で「溪流の宝石」と  
も呼ばれる。

日本では北海道では夏鳥だが、ほかの地域では1  
年中みることが出来る。



・シシャモ

スサム **susam** [susu-ham] (柳・葉)

アイヌの伝説に、ある村が飢饉に襲われ山には何一つ山菜も木の実もならず、けものはどこに消えたのかキツネ1匹、鳥1匹姿をあらわさない年があった。途方にくれた、ある美しい娘が村近くの川に行き神に祈った、「どうか神様、私達人間はみんな飢えて死にそうなのです」「なんとかこの窮状を見て助けて下さい」と、すると川岸に生えていた柳の葉がたくさん川面に落ちて下流に流れたかと思うとたちまち魚に姿を変えて川いっぱい泳ぎだした、それを見た娘は大急ぎで村人を呼んでその魚を取り村人は助かったという話である。それでその魚を「ススハム」と呼ぶようになったのだそうだ。「ススハム」と言ったアイヌ語を和人はシシャモと呼ぶようになった。

○  
・イトウ

チライ **ciray** [ciray] (いとう)

○  
「春はイトウ秋は鮭」という程アイヌにとって食糧であり、皮は服にしたり履きものにする大切なものだった。二メートルを超える巨体の物も捕獲された記録が残っている。気性は荒く釣り人にとって幻の魚といわれている、カエルや水鳥のひなや泳いでいる蛇を食べるなどかなりの悪食としても有名。かつてのアイヌは燻製、日干しにしてから食べた、虫が居るので生では食べなかったが、最近阿寒湖で養殖法が進歩し刺身でも美味しく安全に食べられるようになり今では本州方面の料亭でも人気の食材である。



○  
・ウグイ

○  
スプン **supun**

・カラフトマス

エモイ emoy

ヘモイ hemoy

サケ科、サケ属の回遊魚。

背面や尾びれ、脂びれに黒い斑点があるのが特徴。

降海後、2～3年で成熟して産卵する。産卵は比較的海に近いところで行われ、産卵後は寿命を終える。

北太平洋、ベーリング海、オホーツク海、日本海、岩手県、北海道に分布。



○ ・サクラマス

サキペ sakipe

イチャニュー icaniw

○ サケ目、サケ科に属する。非常に美味しく食用にする。また、溪流釣りの対象魚として人気が高い。

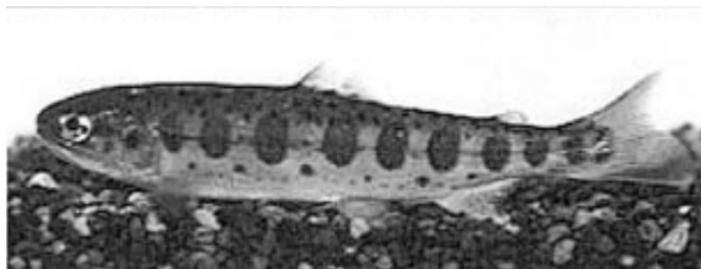
太平洋北西部を中心に分布する。

○ 成長とともに海に下りて回遊し、産卵時に川を遡上する降海型の種類であると考えられているが、一生を淡水で過ごす陸封型の個体もいる。

○ 一般に降海型は大きく成長するが、陸封型は比較的小型のままが多い。

○ サケとマスの産卵場をホリ場と呼ぶが、アイヌ語ではイチャンと言う。根室標津に伊茶仁(イチャン・ウニ)産卵場のある所と言う。他に一巳内(イチャン・ウニ・ナイ)産卵場のある川。

○ 全道的に多い熊牛・熊石などは、熊や牛を使うが、動物のくま・うしとは何の関係もなく、マスの豊漁の所に名付けたもの。(ウシとはたくさんという意味)



・ヒメマス

カパッチェプ、カバラ・チェプ **kapatcep** [kapatcep] (薄い・魚)

ベニマスの陸封型、阿寒湖とチミケツプ湖が原産。北海道の名産であり、阿寒湖温泉では年間通じて食する事が出来る人気の魚。





・ドジョウ

チチラ                    cicira

クシチェッポ    kusceppo

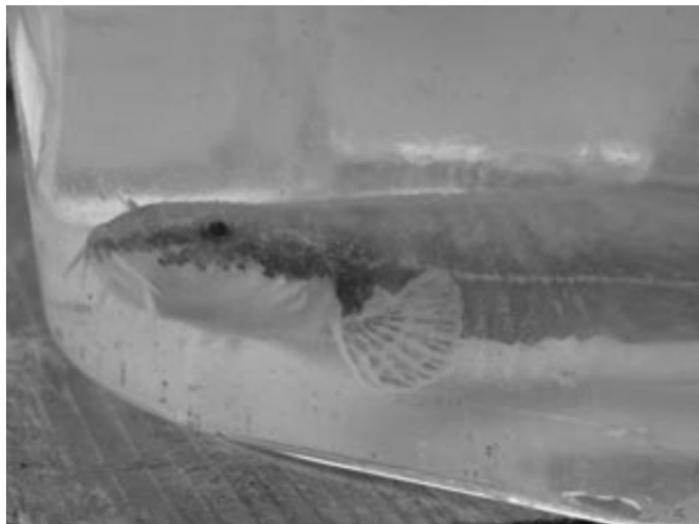


ドジョウを指すアイヌ語はチチラ。柳川鍋で食されるのがドジョウ。北海道のきれいな沢に棲んでいる。『知里辞典』（動物編）には、「§ 9.ドジョオ *Misgurnus anguillicaudatus* (CANTOR) / (4)cicira



(チチラ)《サル》沙 I (69)」と解説されている。

伝承－『萱野茂のアイヌ語辞典』（萱野茂著、三省堂、1996年）チチラの項には「イタチを獲る時に一番良い罟の餌は薄氷の下にいるドジョウだよ。」とされている。



## ・カワシンジュガイ

### ピパ pipa

ピパ (pipa)、川シンジュガイ。食用としては、煮て細かく刻んで酢みそ和えにする。また、乾燥させて保存し、冬に搗いて汁物のダシとした。

殻は、大きなものは保存し、一片を用いて穂ちぎりとして用いた。

補足－明治初期、(戸籍)が整備された頃、アイヌ民族も和人と同様に姓が付けられた。

当時、北海道内では各地でアイヌに対する戸籍の整理が行われ、沙流川流域の(現)平取町二風谷では「ピパウシナイ」(カラス貝が多い沢)という沢の周辺に集落を持っていたアイヌに「貝沢」という姓を付けた。

## ・カジキ

### シリカブ sirkap

カジキのことをアイヌ語で「シリカブ」といいます。スズキ目・メカジキ科及びマカジキ科に属する魚の総称です。大型肉食魚で体長4 m以上のものも多く、メカジキやクロカジキ、マカジキなどどれも剣状に鋭く長く伸びた上顎が特徴的です。とてもどう猛で、時にはクジラを攻撃したり、船板を貫くこともあるそうです。温帯や亜熱帯の海に分布し、夏の一時期、北海道の近海にも姿を現します。

かつて、アイヌ民族は夏の海に船を漕ぎだし、キ

テと呼ばれる投げ鉾一本でカジキ漁に挑みました。肉は汁ものなどにして食べ、上顎の固い部分は杖や鉾などの材料として用いました。



生態や肉質がマグロに似ていることからカジキマグロとも呼ばれることがあります。マグロと異なる分類群です。

#### <シリカプ豆知識>

Q、ちなみにシリカプには、歯がありません。どうやって餌を食べるのでしょうか？長い上顎は何をするにも邪魔なような気がしますけど…？

A、シリカプはカツオやイワシ、イカなどを餌として食べるのですが、あの一見、邪魔になりそうな長い上顎を左右に振って魚をなぎ倒し、飲み込むのだそうです。あの鋭い上顎で叩かれたら魚たちも気を失ってしまうのでしょうかね。

○ ・ニホンザリガニ

ホロカレイエプ horkarayep

○ ニホンザリガニを指すアイヌ語はホロカレイエプ。ホロカ=反対、レイエ=這う、プ=もの、と語源分解できる。ニホンザリガニは、うしろに後ずさりするようにして進む。

○ 伝承-「つながれたざりがに」『おれの二風谷』（萱野茂著、すずさわ書店、1975年）には、「水を汲みに水汲み場へ行くと、そんなに何時もではないけれど、たまあにホロカレイエプ（ざりがに）を細い紐でしばって、水から少し離れた沢辺の木などに、つないであるのを見たことがありました。なんのためにつながれていたのか、当時は知りませんでした。後で聞いた話では、雨降らしのまじないであったということです。それはざりがにの神に無理難題をふ



っかけ、水へ帰りたければ雨を降らせて、ここまで  
沢水を増水させろ、ということであったのです。本  
格的な雨乞いであれば、貂の頭などを用いて大川で  
雨乞いをするけれど、簡単な雨降らしは、このよう  
に小沢で、ざりがにを相手に行ったわけでありまし  
た。(原典どおり)」と記されている。





・エゾサンショウウオ

オチウチェッポ *ociwceppo*

チポンルラップ *ciponrurap*



サンショウウオ科。

成体は全身が黒褐色をしていて、山麓の森林に多く棲み、平地や山地でも見られる。



沼・池・湿地などの止水に産卵し、幼生はそれらの止水に棲む。

水陸両生で夜行性。肉食性で共食いもする。



・カエル

テレケプ **terkep** [terke-p] (跳ぶ・もの)

えぞ赤ガエルをおもにこのように呼んだ。

oowa (鳴き声) ともいう、カエルの鳴き声をオオアと表現したため。



○ ・(ヘビ) アオダイショウ

タンネカムイ *tanne-kamuy*

タンネカムイ (*tanne-kamuy*) [長い・神]。

○ ヘビ類の総称としても、アオダイショウの特称としても呼ばれる。

補足－ヘビは、それほど位の高い神と考えられていない。

○ 伝承－

山火事などで、ヘビが焼け死んでいる姿を見たとき、その状態がぐるぐると体を丸めた姿ならば、「さすが度胸のいい神、あなたであったから逃げもしないで神本来の姿になったのですね。諸々の神があなたの度胸を褒めたたえることでありましょうよ」といいながら、軽く礼拝します。反対に、長々と伸びた姿であれば、「おまえが聞いて来たはずのアイヌの国土の山火事なのに、何だその逃げざまは。意気地なしの神め」と言って通ると言います。

○ これには、経緯があるのです。

○ 「昔々、アイヌの国土は美しく住みよいという噂を聞いた蛇は、是非アイヌの国へ行かせて下さいと、天の神にお願いした。すると天の神は、アイヌの国というところは美しいことばかりではなしに、山火事も多いので、もし山火事が発生したときに、いくじなく逃げ隠れないなら、行ってもよいといわれた。それを聞いた蛇は少しためらいはしたが、万一山火事になったとしても、いくじなく絶対逃げも隠れも

致しません、と神様に約束したのでようやく下界に降りることが許された」、と。

そういうわけで、山火事るとき蛇の焼け死んだ姿を見たときには、そのように声をかけるのだということです。「萱野茂／おれの二風谷（蛇の話）から」

## ・マムシ

### トッコニ tokkoni

アイヌにとってマムシはカムイですが、どのような神なのかあまり伝承がありません。アイヌはヘビが嫌いなので、話題にのぼることも少なかったようです。

萱野茂氏伝承のウエペケレに次のようなものがあります。

昔、あるコタンにパコロカムイ（疱瘡の神）がやってきてコタンの者が次々と死んでいきました。1人の男が子どもだけでも助けようと、幼いわが子を草むらに置き、祈りを捧げました。それを見ていたマムシのじいさん神が、可哀想に思いその子を助けることにしたのです。やがて村の者は疱瘡で死に絶えました。マムシのじいさんは、幼子を育てたのですが、何故かいつもその子に言いがかりばかりつけていました。やがて子どもが成長すると、じいさんは全てを打ち明けました。「お前は一人前になり、チャランケも立派にできるようになった。これから、パコロカムイの村に行きチャランケして、死んだ村人たちの魂を取り返しくるのだ。」と。何かと言いがかりをつけていたのは、雄弁になってチャランケに勝つ為でありました。そして、若者は村人の魂を取り返してきました。

全道各地にトコタンという地名があります。多くは、トゥ・コタン（廢村）という意味なのですが、

浜益にある床丹には幾つかの説があります。トッコ  
ニ・コタン（mamushiの村）と、トゥ・コタン（廃村）。  
このあたりはmamushiが多く生息しています。実際には  
古い時代の竪穴住居跡なのですが、疱瘡によって  
廃村になった村という説もあり、先の物語と照らし  
合わせると、とても興味深いです。



- ・タラバガニ  
ホテムテム hotemtem  
アムシペ amuspe

- 十脚目・異尾下目・タラバガニ科に分類される甲殻類の一種。

- 食用に珍重され、分布域の沿岸では重要な水産資源の一つとなる。

- 名前に「カニ」とあるが、ヤドカリの仲間。  
和名は生息域がタラの魚場と重なることに由来。  
アブラガニと混同されるが、甲幅は25cmほどだが、脚を広げると1mを越える大型甲殻類である。  
前身在短いトゲ状突起で覆われている。



・ハナサキガニ

フレアムパヤヤ hureampayaya

エビ目・ヤドカリ下目・タラバガニ科に分類される甲殻類の一種。

タラバガニの近縁種で食用に漁獲される。名前に「カニ」とあるが、ヤドカリの仲間。

甲幅・甲長とも15cmほどで、甲殻類としては大型だがタラバガニほどではない。

タラバガニよりも体のトゲが長く、脚は太く短い。

和名の「ハナサキ」は漁獲地となっている根室の地名「花咲」に由来するという説が有力だが、茹でたときに赤くなって花が咲いたように見えることからという説もある。



・毛ガニ

アムパヤヤ ampayaya

オテンパヤヤ otempayaya



エビ目・カニ下目・クリガニ科に分類されるカニの一種。

甲殻類クリガニ科に属し、オオクリガニとも呼ばれる。



水深30mから200mの浅い海の砂泥底に生息。

体は全身が淡赤褐色で、体を覆う殻はあまり固くないが、短い剛毛が密生し、和名はこれに由来する。

お産のときに大きな鋏で子供をはさみだしてくれ  
とって頼まれたりする。安産の神とする地域もあります。



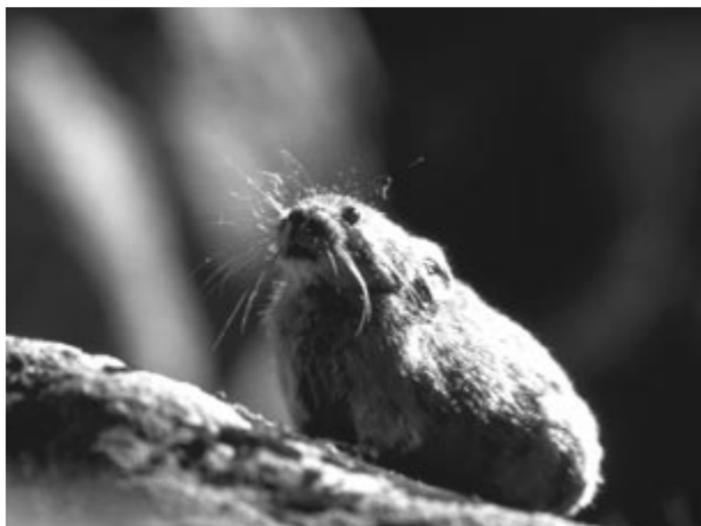
### ・(エゾ) ナキウサギ

ウサギ目・ナキウサギ科に属する。

ナキウサギは北アメリカに2種がいて、他は全てアジア大陸に生息。特にヒマラヤ山脈近くに多い。

3～4万年前にシベリアから北海道に渡ってきたと考えられる。北海道の中央部に多く生息しており標高1500mから1900mの山地に分布。

ねずみではなくウサギである証拠に上あごの前歯の裏側にも歯があり、二重になっている。



---

## 「ガイド教本・アイヌ民族編」〈動物編〉

編集：(社)北海道観光振興機構アイヌ文化部会ワーキンググループ  
秋辺日出男 阿寒アイヌ工芸協同組合（阿寒）  
川村 久恵 川村カ子トアイヌ記念館（旭川）  
村木 美幸 (財)アイヌ民族博物館（白老）  
萱野 志朗 萱野茂二風谷アイヌ資料館（平取）  
長田 佳宏 平取町立二風谷アイヌ文化博物館（平取）  
貝澤 和明 (社)北海道ウタリ協会  
西村 誠 (社)北海道観光振興機構  
茂手木貴一 (社)北海道観光振興機構

協力：(社)日本観光協会、釧路市動物園、帯広百年記念館、池田亨嘉、内田祐一、知床斜里町観光協会、知床羅臼町観光協会、(株)北海道マリンパーク、旭川市経済観光部観光課、浜中町商工観光課、阿寒湖漁業協同組合

発行：(社)北海道観光振興機構  
〒060-0004  
札幌市中央区北4条西4丁目 伊藤加藤ビル5F  
TEL011-231-0941、FAX011-232-5064

<http://www.visit-hokkaido.jp/>

発行：平成21年2月28日

---